

### 事例3：新しい技術開発の貢献度評価

I県の学術研究都市に立地するN光子技術開発研究所（N研）は近年、微弱光計測技術の開発・応用に力を入れている。微弱光計測技術といえば、環境計測や光通信技術等の分野でも盛んに研究が行われているが、N研が着目したのは医学分野への応用。プロジェクトチームを組み、より安価で簡便な医療検査装置の実現につながる知的センサシステムの開発を急いでいる。

その中心となるのがプロジェクトチームのリーダー、O特別研究員。彼は微弱光計測における著名な研究者で、5～6年前にヘッドハンティングされてN研にやってきた。元は光学機器メーカーの一社員だったが、独創的な発想力で次々に論文を発表し、社外からの評価が高まった。だが、当時の所属先では研究実績に見合う評価を与えられていなかったことが、新規分野の軸となる研究者を求めているN研のニーズと合致したようだ。あくまで噂だが、移籍にあたってはかなりの高待遇を約束されたいらしい。

O特別研究員のもとで、職員の監督などの実務を担当しているのがN研生え抜きのF研究員である。誠実で公平な人柄であり、部下からの信頼も厚いが、それだけに最近のチームの状況には心を痛めている。というのも、プロジェクト発足から5年が経過しており、政府から出ていた援助も今年度で打ち切られるというのに、まだ思わしい結果が出ていないのである。学者肌のO特別研究員は、研究がうまくいかないことでイライラし、他の所員と口をきくこともほとんどなくなってしまった。どうしても必要な事柄だけはF研究員に伝え、それをF研究員がチームメンバーに伝えるという有様である。まさに板ばさみだ。

部下には口が裂けても言えないが、O特別研究員の研究者としての才能は、盛んに海外の学会で論文を発表していた約10年前までで燃え尽きてしまったのではないかと、F研究員はひそかに考えている。だからといってO特別研究員に代わるアイデアを考えつけるわけでもない自分自身にも、忸怩たる思いを抱かざるを得なかった。

雰囲気最悪の研究室内にあって、いつもさわやかな言動で周囲を和ませてくれるのが地元企業から派遣されてきた若い技術員、H君である。電子機器メーカーに所属する技術者であり、電子回路製作のため出向してきているに過ぎないが、業務に対する真摯な姿勢と明るさで、チームの誰からも好感を持たれていた。しかも大学院では光学を専攻しており、現在、間接的にせよ最先端の研究チームの仕事に携われることがうれしくて仕方がないのだという。研究室内で行われるミーティングや所員同士のやり取りを耳にするうちに、研究内容についても深く理解するようになったようだ。

ある日のこと、F研究員はH君からアイデアの提供を受けた。単なる回路の手直しと思いき、気軽に聞き始めたF研究員だったが、話が進むうちに、そのアイデアは活用次第で、研究全体を大きく前進させる可能性を秘めたものであることがわかってきた。F研究員が早速0特別研究員に相談すると、思いがけず「その方向で検討を進めよう」と即答が返ってきた。どうやら0特別研究員自身も、そのあたりに突破口がありそうだと気づいていたが、具体的にどこをどうすればいいかは模索中であつたようだ。もちろん、プライドの高い彼がそんなことを口に出すわけではないのだが。

それ以来、研究は一気に弾みがついた。改良策の発案者であり、回路製作者であるH君も、もはやチームに欠かせないメンバーとして連日深夜まで作業に取り組んでいる。これまでにない熱気が研究室を包み、年度末を待たずに、性能面で従来型を大きく上回るセンサの開発が終了してしまった。

今後も実用化に向けた更なる開発が続くが、ひとまずは成果を挙げたことで、F研究員の気も緩んだのか、0特別研究員に対して、普段ならしないような進言をした。

F研究員： 「今回の成功はまさに、H君のおかげですね。彼もすっかり溶け込んでいるし、どうでしょう、出向元に話をして、うちの正式な研究員になってもらっては・・・」

この発言に0特別研究員は気分を害したようだ。

0特別研究員： 「まるでH君一人で成し遂げたような言い方だが、そもそもこの研究の大筋は私自身が考えて、長い時間をかけて進めてきたものだよ。終わりのほうでたった一つアイデアを付け加えた部外者を最大の貢献者のように言うなんて、君も研究者として情けなくないのか」

F研究員： 「あ、そういう意味ではなかったんですが・・・」

弁解をしても後の祭りである。0特別研究員はあからさまに不機嫌な顔をして、黙り込んでしまった。

失言の余波は思いがけないほど大きかった。次の日から、H君が研究室に現れなくなったのである。聞くと、0特別研究員から「開発が終了したためH君の派遣契約を終わりにしたい」という突然の申し出があつたらしい。だがそれが表向きの理由であることはいうまでもない。チームにとってはまだまだH君の力が必要だし、H君自身もこの研究に参加できたことを喜んでいて、「実用化に向けて、さらなるアイデアがあります」とまで言っていたのである。F研究員は、0特別研究員のプライドの高さや若く才能あふれる研究者への嫉妬心の強さに今さらながら驚いた。

同時に、この出向停止にはもっと現実的な理由があることにも気づいた。今回の開発についてはこれから特許を申請することになるが、N研の規定により、事業化された場合の経済的リターンは、組織と特許出願の際に登録された発明者で折半することと決まっている。もしH君を発明者に加えて人数が増えれば、それだけ利益も薄くなってしまうから、あくまでH君は期間契約の職務担当者に過ぎないということを強調したかったのかもしれない。F 研究者の中に開発成功を喜ぶ気持ちは消えうせてしまい、このような指導者のもとでプロジェクトに忙殺された5年間は、もはや徒労とすら感じられてしまうのであった。